サポーターになる方法教えます

連携で可能性を広げる

隅田川サポーター大募集！

隅田川サポーターとは…

隅田川が好きで、「隅田川で活動している企業や団体と交流したい」「隅田川をもっと盛り上げたい」という企業・団体の皆様をサポーターとして登録する制度です。

隅田川サポーターに登録すると…

SNS 等で「# 隅田川でつながりたい」をつけて情報発信していただくほか、交流会等を通じて他のサポーターと交流することができます。

サポーターになって実現する 2つの『つながる』

① 情報発信でつながる！

SNS（twitter 等）を積極的に活用して情報発信

ハッシュタグ『# 隅田川』『# 隅田川でつながりたい』等を使用して隅田川の活動情報を簡単に検索しやすくなります。

② 活動でつながる！

サポーター同士の情報交換だけでなく、イベント開催等に関するノウハウの共有や共同イベントの開催など、それぞれの活動でつながることができます

応募要項

対　　象	隅田川で活動したい企業・団体の皆様
登録方法	隅田川サポーター登録申し込み用紙に下記の必要事項をご記載の上、窓口にメールにてお申し込みください ●企業団体名　●住所　●連絡窓口　●連絡先　●企業・団体概要 ●隅田川で活動したい内容　●紹介したい内容　●SNS アカウント
募集期間	毎年 12月末まで（1年ごとに募集・更新）
活動期間	毎年 1月1日から 12月31日まで

お問い合わせ窓口

東京都建設局河川部計画課　河川利用促進担当

TEL　03-5320-5439

メール　S0000384@section.metro.tokyo.jp

ここから水辺の新たな文化が生まれる！

未来の隅田川

サポーター交流会

illustration：林 匡宏

交流会について 02p

隅田川サポーター交流会レポート

隅田川 × 文化・芸術 ▸▸▸ 04p

隅田川 × 水辺活用 ▸▸▸ 08p

隅田川 × 地域・マルシェ ▸▸▸ 12p

隅田川 × 未来 ▸▸▸ 16p

妄想「隅田川万博絵図」 20p

こんなことやってきました 22p

隅田川サポーター大募集！ 24p

sumida

さあ、隅田川の未来を想像しよう。

交流会について

これまで、隅田川では「人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間」の創出を進めてきました。

この交流会では、実際に隅田川での活動に関わっている隅田川サポーター※の視点から、これからの「未来の隅田川」に向けて語り合いました。

隅田川サポーターが想い描く未来の隅田川

隅田川サポーターの個々の活動が、交流会を通じてつながり、大きな流れになりつつあります。利用者の目線から隅田川の将来イメージを描くため、令和４年度に拡大交流会を全５回にわたって開催しました。

拡大交流会では、「文化･芸術」、「水辺活用」、「地域･マルシェ」をテーマに、３名のコーディネーターを軸に多彩なゲストスピーカーをお招きし、隅田川の未来について語り合いました。

この冊子は、拡大交流会を通じて、サポーターが想い描いた未来の隅田川を記録したものです。サポーターが発信する隅田川の魅力や可能性、そしてサポーターが隅田川に寄せる想いを皆さんも感じていただき、隅田川の未来に向けてぜひ一緒に活動していきませんか？

※隅田川サポーターの案内については最終ページをご覧ください。

© 隅田川マルシェ実行委員会
隅田川マルシェ越中島の様子

交流会レポート〜2022.09.22〜

河川と文化をつなぐ

隅田川×文化・芸術

「隅田川×文化・芸術」をコンセプトに、NPO 法人トッピングイーストの清宮氏をコーディネーターに迎えて、両国リバーセンター前の大階段を舞台に隅田川における文化・芸術交流の未来を想像する場を作りました。

交流会コーディネーター　清宮陵一（NPO法人トッピングイースト）

●きよみやりょういち●

1974年東東京生まれ。2006年より音楽家による即興バトル『BOYCOTT RHYTHM MACHINE VERSUS』を主宰し、五大陸制覇を進行中。坂本龍一氏のレーベル commmons に参画後、合同会社ヴァイナルソユーズを立ち上げ、特別なヴェニューや公共空間でのパフォーマンスを多数プロデュース。同時にNPO 法人トッピングイーストを設立し、東東京に根差したアートプログラムを展開。2021年『隅田川怒涛』を実施。

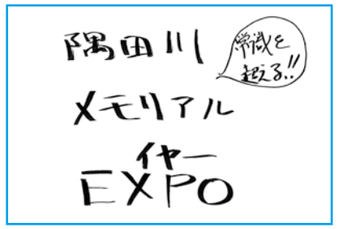
交流会では参加したサポーターの「今後やってみたい文化・観光・芸術・イベントについての妄想」に対し、ゲストや参加者から意見やアドバイスをいただきました。

隅田川メモリアルイヤーを実現したい！

参加者：「隅田川メモリアルイヤー」EXPOみたいなものを５年後ぐらいに実現することです。みんなやっている楽しいことや意味のあることっていっぱいありますよね。それを結集させて日本中に発信させるのです。その舞台となるのは隅田川しかないと思います。ぜひ隅田川の関係７区や広域自治体も協力し合い、そしてアーティスト、民間事業者、市民団体など、それぞれが出来ることを結集して実現できたらと思っています。

世界ではそういうことが既に始まっていて、EU ではある町にフォーカスして「欧州文化首都」という取組を行い注目を集めています。その場所の魅力を発信したり、その場所の古い体質を壊したり、また世界中から新しい投資を促したりしています。

清宮：実現に向けての課題は?



参加者：「力の結集」の仕方を、みんなで一生懸命考えるというところが多分課題なんだろうなと考えています。

清宮：ありがとうございます。「結集」という意味でいくと墨田区観光協会の森山さん、文化と観光という別に思えるジャンルでも結集がありえるのではないですか?

森山：私は観光というのは、あらゆる取組みがコンテンツになると思っています。ですから、観光と文化、観光と音楽、観光と産業といったように、観光は様々なものとの融合だと思います。

清宮：まるでアメーバーのようにつながる存在が観光ということですね。

ぼんでん祭の復活

参加者：みなさん「ぼんでん祭」というのをご存じでしょうか？ 隅田川のここより少し北側にある白鬚神社で行われていたお祭りです。「ぼんでん」というのは五平みたいなもので、それを竹の先に付けて船上の宮司が持っていて、そこに目掛けて船から

荻原 康子

「隅田川 森羅万象 墨に夢」統括ディレクター。企業メセナ協議会で顕彰事業と機関誌等を担当し、延べ 500 件程のメセナ（芸術文化支援）の現場を取材。他にアサヒビールのメセナ活動のコーディネートや助成制度の設計、調査・コンサルティング等に携わる。2017 年墨田区文化振興財団常務理事、2019 年より現職。

吉田 武司

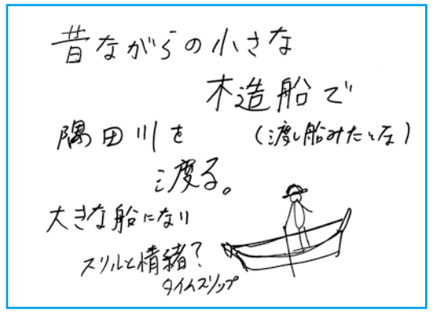
「アートアクセスあだち 音まち千住の縁」ディレクター。NPO 法人音まち計画理事。これまで、埼玉県北本市や東京都三宅島など各地でアートプロジェクトの運営を担う。東京文化発信プロジェクト室（現・アーツカウンシル東京）プログラムオフィサーを経て、2015 年より現職。

森山 育子

墨田区観光協会理事長
2011 年よりジェイコム東京すみだ局の局長として墨田区で仕事を始める。2018 年に一般社団法人墨田区観光協会の理事長兼事務局長に就任。協会の財政基盤の立て直しを進めるほか、地場産業を活かしたツアーやコーディネート事業の立ち上げにも取り組んでいる。

Guest speakers

みんなが川に飛び込み泳いでいくというお祭りです。ですが、川の環境が悪くなり途絶えてしまいました。昭和 30 年代に復活した時の写真を見ると参加している人たちがとってもいい顔しているんです。その中には僕の祖父も写っていました。いつからやっているのか、どうしてこんなことをしているのか、それさえあやふやなので、僕はそこから掘り下げていき10年後くらい先に復活したいと思っています。みんないい顔で船に乗って行う儀式「ぼんでん祭」を年に１度、いや10年に一度でもできる環境を作れたらと思っています。



清宮：復活までは長い旅になりますが、是非実現していただきたいですね。

小さな木造船で隅田川を渡る

参加者：ちょっと子供じみた妄想なんですけども、昔ながらの木造船で隅田川を渡ったりするのが楽しいかなと思いました。大きな船だったり、水上バイクが行き交う中に、小さな渡し船みたいなのを漕いでいたらちょっと風景も変わるかなと思ったのです。

清宮：それは大きな観光資源になりそうですね。森山さんいかがですか?事業収益性についてコメントいただけないでしょうか?

森山：収益性は難しいとは思いますけど、プロモーションをどの程度やって定例化できるかが課題ですね。でも私も似たようなことを考えてました。

清宮：そうなんですね。森山さんの案をお聞きしても良いでしょうか？

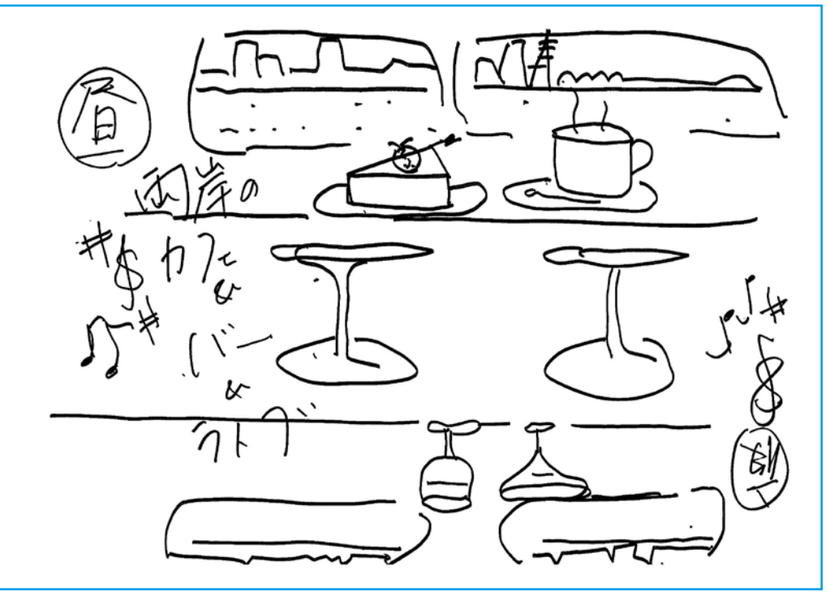
ゆっくり過ごせる通勤船の復活 !!

森山：私は船で普通に通勤できるようになるといいなと。喫茶店風とか、BAR 風とか、ちょっとライブが流れてるようなゆっくり過ごせる船があったらいいなと思っています。それをイベント船として定期的に通勤船、カフェ通勤船、ナイト通勤船みたいなものが作られたらいいなって思っています。

これを走らせてくる船会社があるかどうかよりも、料金の設定とか、どうやれば隅田川の上の方から下の方までちゃんと走らせられるかといったことのほうが課題だと思います。

清宮：1時間とか1時間半とかで、お茶とホットケーキが付いていくらぐらいですかね。

森山：2000円ぐらい。普通の喫茶店だって珈琲とケーキのセットで 650 円〜 800 円、ちょっと高いと1500円ぐらいですよね。そこにワンコイン付ければ、ライブや音楽を聴いてワインとかマティーニを飲みながら帰れるって凄く良くないですか。混み合った通勤電車に乗るぐらいなら、こっちのほうが気持ちにゆとりを持てて本当にいいなと思うんです。私は通勤船復活で。



清宮：ありがとうございます。他に船系のアイデアを書いた方いらっしゃいませんか？

川風感じながら大スクリーンで映画鑑賞

参加者：両国リバーセンター前の大階段から映画を上映する会をやりたいです。大きな船を浮かべてそこにスクリーンを設置して、ホテルからも川沿いからもみんなで映画「HOKUSAI」を見たいなと。地方から来て頂いた方にもその体験を記憶に残る滞在にしていただき、また来て頂けたらなという狙いです。課題は費用だけです。本当に妄想過ぎるので費用がどれだけかかるかが、さっぱり見当がつかないなっていうところが問題です。

荻原：台船にスクリーンを載せて橋の下をくぐって、ここに来て川底にアンカーを打って固定すれば、できないことではないですよ。できればスクリーンは風が抜けるようにしておいて、綺麗に見せるならプロジェクターも台船に乗せちゃえばいい。電源はジェネレーターで対応ですね。

ロープウェイで移動できるだけでも話題性がある

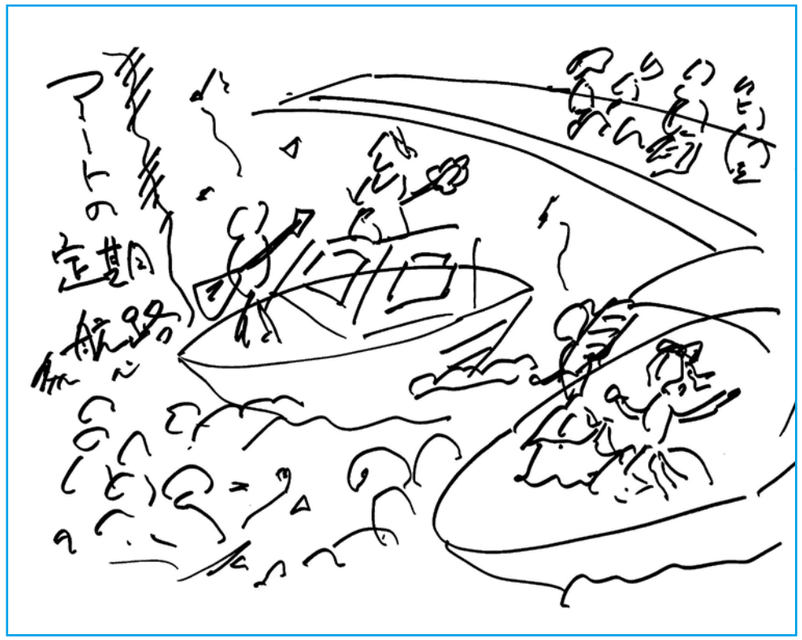
参加者：横浜のエアキャビンみたいなロープウェイがあったら楽しいなと思います。例えば右岸から左岸にちょっと斜めに架けてもいいですね。短い距離でもロープウェイで移動できるだけでも話題性があり、十分人が集まってくるのかなというふうに考えております。

堤防がずっとつながっているのを見ていたら・・・

吉田：堤防を五線譜に見立てて演奏者が川沿いにずっと居て、船がメロディーラインになって、船に合わせて河川敷（テラス上）の人たちが演奏するっていう楽曲制作とコンサートを考えました。隅田川の行政区分を越えていろんな人が集まらないとそもそもできない。そこにランタンとビアガーデンを置いてみたいな感じに、どうでしょう。

清宮：何か障壁はありますか？

吉田：めちゃめちゃ具体的に考えると、演奏者どんだけいるんだっていう問題もあるし・・・1010人※どころじゃないかもしれない。その取りまとめをするのもすごい大変そうだし、そもそも河川敷沿いに人がいるので、実際誰がこの音楽を聴けるのかが分からない。そうなると騒音の問題もあるし、課題山積の企画なんです。



妄想定期船の就航

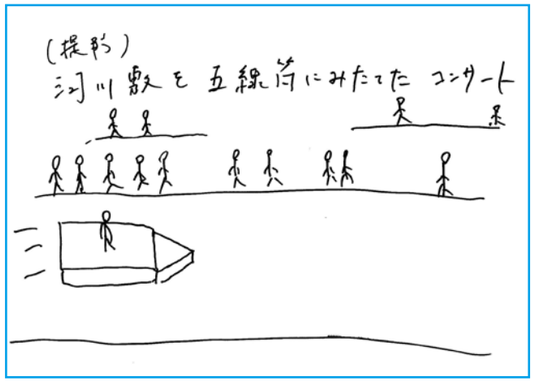
荻原：私はみなさんの総取りと言うか、今出たようなことがちゃんと行われる定期航路を作ることですね。課題は山ほどありますが、皆さんのアイデアが、ひとつひとつ形になるような場とか体制とかを、さっき出た「力の集結」で実現できたらいいなと。

いろんな人がそこに魅力を発見したり、加えたりっていう連鎖が起こってくると思うので、妄想の定期航路を作りたいです。

吉田：このたった何十分だけで、凄いアイデアがいろいろ出てきましたよね。やっぱり川と川岸って、人の妄想を託しやすい場所なんだろうなと思います。川が場所とか人を隔てるものじゃなくて繋ぐものとして使われていくといいなと思うんです。そしてこの会もいろんな人がつながる場になっていくと、隅田川が昭和や大正や明治みたいに、みんなが遊ぶ場所として使われていくと思いました。

小さなことから少しずつ形をつくる

清宮：今起こっていることも素敵なんですが、それをみて、自分もそこで何かをやってみよう、何かを起こそうというアクションがうまれるようにしたい。川とテラスが、もっとどんどん活用できるようになることで、街の良さ、価値が絶対に上がると思います。今日いろいろ妄想してくださったことを、はじめは小さな形でも着実に進めていくことで、先を向いて少しずつ形を作っていくっていうのが大事じゃないかなと、今日パブリックなスペースで対話してみることで改めて感じました。



※【千住の 1010 人】千住と 1010 のだじゃれが発端。「千住だじゃれ音楽祭」が中心となり、1010 人の演奏者によるコンサート『千住の 1010 人』を行った。

交流会レポート〜2022.11.09〜

水辺のオープン化を進めるミズベリング

隅田川×水辺活用

「隅田川×水辺活用」をコンセプトに、ミズベリング・プロジェクトディレクターとして水辺の魅力を創出する岩本唯史氏をコーディネーターに、隅田川の水辺空間活用の最新動向、流域展開に向けた実践的な議論を行いました。

交流会コーディネーター　岩本唯史（ミズベリングディレクター・水辺総研）

●いわもとただし●

ミズベリングプロジェクトディレクター／（株）水辺総研代表取締役／水辺荘共同発起人／建築設計事務所 RaasDESIGN 主宰
建築家。全国の水辺の魅力を創出する活動を行う。横浜の水辺を使いこなすための会員組織、「水辺荘」の共同設立者。これからの建築士賞（2017）、まちなか広場賞奨励賞（2017）、グッドデザイン賞金賞（2018）

異なる取り組みを行っているメンバーを集め、それぞれの取り組みに対しての質問を交わしました。

最初は漠然とした疑問から

大川原：北区観光協会は荒川河川敷をうまく使ってらっしゃいますが、最初どう使おうと思ったことが発端だったんですか?

山田：バーベキュー場も10年ぐらい前まではルールも知らず、草バーベキュー場と言う感じでした。その頃に私が感じたのは、「これ何でもできそうだけど何ができるかよく分かんないな」っていう漠然とした疑問でしたね。

岩本：荒川下流河川事務所のミズベリングの取り組みも影響したんじゃないですか?

山田：そうですね。きっかけをいっぱい頂いてるなと思いました。例えばAKABANE PICNIC FESTAで北赤羽と岩淵を結ぶ船を貸し出して頂いた時も、「船もっと使いましょうよ。川口と戸田も結んでいきましょう」と言っていただき「いいんですか」という感じでチャンスを頂いたことを覚えています。

荒川：私はここの事務所の勤務2回目なんですけど、12年前に勤務してた頃とこの春転勤してきた時では、荒川河川敷の使い方がビックリするほど変わっていました。また、北区さんの観光振興プランの中にも私どものamoa（荒川知水資料館）を観光拠点として挙げてくださったことも、ありがたいことだと思っています。

AKABANE PICNIC FESTA

岩本：これがまさに新結合なわけで、それぞれが価値を認め合っている幸せな状態だと思います。

歩み寄り・越境し合う凄さ

飯石：河川は国・都・市町村がそれぞれ管轄するエリアがあるため、3者でのコミュニケーションは大変だと思っていましたが、互いのプログラムで連携していて、越境し合ってるところが凄いなと思いました。

岩本：国土交通政策で、そういう結合をしてみなさんの力を合わせてやってください、というのがどんどん増えてきていますね。

飯石：そうですね。公園では都市公園法の改正（Park-PFI）があって、民間事業者が公園活用に参画しやすい状況になっていて、国が規制をどんどん変えているのはうれしい流れですね。

飯石 藍

株式会社 nest 取締役
公共R不動産コーディネーター
Region works ディレクター
公共空間活用を中心に様々な公民連携プロジェクトに携わる。民官連携でまちの魅力向上や賑わい創出を目指す「IKEBUKURO LIVING LOOP」にも参加

山田 浩太

東京北区観光協会
北区観光協会は、水辺を活用した観光コンテンツの充実に取り組んでいる。ライトアップ / ミズベウォーク / 音無親水公園 / 川床イベント / 北区花火会 / ドローンテストフィールド / 治水資料館の観光拠点化。その他数々のイベントを実施。

渡邉 聡

一般社団法人竹芝エリアマネジメント事務局長
竹芝エリアマネジメントは、港区や地域事業者とともに官民連携で未来ビジョンを創り、東京を代表する世界的な水辺の実現に向けて様々な取り組みを進めている。

荒川佳子

国土交通省
荒川下流河川事務所

大川原雄一郎

東京都建設局河川部

Guest speakers

気持ちいいねからの発想

渡邉：竹芝のプロジェクトマネジメントでの発見といえば、2015年にまだビルも着工する前の本当に寂しい状況の中、何からやっていこうかと思った時に、周辺公共空間を活用していこうということでビアガーデンを始めてみたら、「夜の潮風に吹かれながら飲むビールっていいね」って地域の企業で働く方からも大きな反響を得ました。やってみるとその情景が見えてきて、そこで共有と継続ができていくというのを体感しました。

飯石：体感的に気持ちいいということから理想の風景を想像するってとてもいいなと思います。実はこれって一番大事なことで、その感覚が人の心を引き寄せ、人の流れを生み出すんだと感じました。

岩本：水辺の環境は人間が生物学的に気持ちいいと思うものがあるから、多くの人と感覚を共有して「もっと生かしたほうがいいよね」っていうきっかけづくりにできるしやることで知見も高まりますよね。

上流のエリア特性を生かした活用を考える。

岩本：大川原さんの目から見て、上流のここが面白いと思うところはありますか?

大川原：上流でやっぱり歩いていていいなと思うのは、汐入公園の伸びやかな風景ですね。一度行くと天気が良ければここで日中遊べると思うような空間があったりします。それと上流の方が公園と団地が多い。

岩本：住環境の整ったところが河川沿いに凄く多くあるのが、上流の面白いところですね。でも、今まではグラウンドレベル（1階レベル）で何か賑やかな場所にしようという考えでしかなかった。そこに魅力的な川を眺めながら、豊かな生活が送れる場ができてほしいなと思うんですけども。

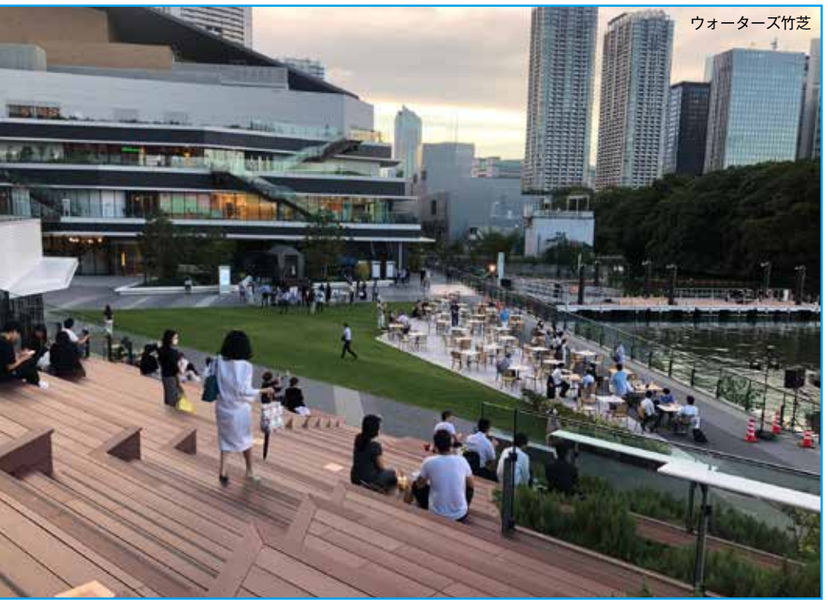
飯石：昭和に建てられた団地って、容積率がとても低く、敷地もゆったりして緑に囲まれているんですよね。今同じものを建てようとしても難しい。だからこそ、この時代に豊かな緑に囲まれて過ごしたり、川を眺められる場所で過ごせるのってすごく魅力だと思うんです。住まいや暮らしの豊かさみたいなものを、上流のエリアの魅力として発信できると面白いですね。

荒川：話は変わるんですけど、ピクニックフェスタでキッチンカーが賑わっていたのに、すぐ売り切れちゃってみんな残念がってたみたいに思えたんですが?

山田：キッチンカーを呼ぶ時に、食数を提示しなければいけなくて、用意した数だけ売れないとその分の食べ物を腐らせちゃう。それを恐れて少なく提示するとたくさんお客様がいらっしゃった時は、すぐに売り切れちゃうことになるわけです。

荒川：ピクニックフェスタの時は、少なめに設定してしまったというわけですね。

岩本：イベントやる時にどういった知見が得られるかというところで、いい体験談をいただきました。経験を重ねていけば誤差


ウォーターズ竹芝

はどんどん減るわけですよね。

消費者からクリエイターへ

飯石：私は豊島区に暮らして10数年経つんですが、最初は全く愛着を持てなくて、単に利便性の高いまちだというイメージしかありませんでした。それが、「としま会議」という、地元の人をゲストに迎えたトークイベントの企画に関わるようになってから自分のまちに対するイメージは一変しました。街中に知り合いが増えて、としま会議で出会った人たちと一緒にまちを楽しむ企画を

始めたりしていました。そして豊島区の事業として、グリーン大通りと南池袋公園等を活用してまちに賑わいを作るというプロジェクトを2017年から実施しています。マーケットを企画したりファニチャーを設置したり、まちの人が行きたくなるプログラムを実験的に進めていったことで、当初は関心が集まらなかったエリアに対して「なんか池袋いいよね」という外からの声が届くようになってきて、そこから地元の人もまちへの愛着が増していったような気がします。

岩本：その愛着の中に人との関係が大きく占めているということですね。

飯石：それはかなり大きいと思います。それと「ほしいモノを自分たちで作れたら」というスタンスとして、個人でやりたいことを試す場所として公共空間を活用できるようになるといいなと思います。消費者として生活するだけではなくて、誰もがやりたいことを表現できる“クリエイター”としてまちで暮らすことができると、まち自体が多様性を持ち、色彩が増すなと感じます。公共空間が持つ可能性ってとても大きいなと思っています。

岩本：北区の観光協会もプレイヤーの呼び込みを行っているところですが、何かアドバイスありますか?

提供ではなく一緒に

飯石：事業者に対して、単にコンテンツ提供者ではなく、一緒に街を良くしていくという目的を共有するための場として実行委員会を結成し、観光協会が主導するのではなく、街の企業や個人が立場を超えてフラットに動いていく取り組みが最近各地で増えているように感じます。それも街への愛着を育んでいくためのプロセスの一つかなと思います。

岩本：渡邊さんは今の話を聞いて、プレイヤーの人たちとの関係はどうですか?

渡邊：先ほどのビアガーデンを立ち上げる時も、企業というよりも地元のクラフトビールのお店に声かけたり、小笠原で音楽イベントやってる方に声かけたり、地域や関係のある人たちを巻き込んでいきました。また、最近だとビルの低層部に水田や菜園があって、そこを小学校が使いたいと言っていただき、今では授業と連携するなど、地域とのつながりが広がってきています。

地域にどうコミットするか

飯石：デベロッパーである東急不動産さんが、ここまでやられてるって本当にすごいなって改めて思いました。社内ではエリアマネジメントの活動をどうやって説明されてるんですか?

渡邊：エリアマネジメント自体で稼ぐのは難しいんですが、ウォーターズ竹芝も含めたエリアとしての魅力を維持向上していかないと、ビルの価値とか不動産会社としての収益も安定的に得られないだろうということは、会社にも理解してもらっています。

岩本：そういうことで言うと、最初にインセンティブを作った都市再生特区の仕組みがすごかったんですよ。これってすごく重要な話で、大家さんとして地域にどうコミットするか最初から設定してあったわけですよ。それが容積緩和とセットで規制緩和の中に入っていたというところがすごい。僕はこういう仕組みを川沿いの各基礎自治体さんや東京都さんの都市政策とか住宅政策の取り組みとしていただけると、本当に価値が緩和のほうにも出てくるし、川の方にも返ってくるので、そういう総合的な取り組みをぜひ進めていただきたいなと思っています。

飯石：それはまさに規制と言うか新しい仕組みづくりですよね。

今後のサポーター交流会

大川原：隅田川サポーター制度は、お互いがSNSで発信したり、交流を深めたりするのですが、みなさん今後こういう制度というのがどうなったらいいなと思いますか?

渡邊：サポーターのみなさんからは、例えば干潟をこういうことに使えるんじゃないかみたいなアイディアをいただきたいと思います。また、情報の共有だけでなくて、きっかけの共有みたいなこともできたらいいなと思いました。

山田：困りごとや失敗談とかを蓄積した知識ボックス的なものをつくり、そこに自由にアクセスできたらすごく参考になると思います。

飯石：知見を共有するのは重要だなと思います。お互いの現場を体験する「交換留学」のようなことをしてみるとか、各地でやっている取り組みに参加者ではなく運営側で入ってみるとか、ただ行ったり事例を学ぶだけではなく実際に体験することで全然違う景色が見えたり自分の地域にフィードバックできることも多いと思います。あと、今回「隅田川道中」の両国エリアで開催されていたイベントにお邪魔してみて、パフォーマンスやアートで流域を繋ぎながら、各スポットでは地域ごとのイベントが開催されていて、そうやって縦糸と横糸が編み上げられているようなプログラムがすごく面白かったんです。川をどう使うかという観点で川だけを見るんじゃなくて、流域のエリアで活動するプレイヤーとの接点をつくる、言い換えれば川の活用で動いている人以外にも川への興味を持ってもらう動きが必要だと思っています。

岩本：すばらしい水辺に親しめる環境がつくれる気がしてきましたね。今までにない結合が未来をつくるということを、会の最初のほうで僕がお話しましたけど、その環境をつくるのがこういうサポーターの場だと思います。

竹芝干潟

交流会レポート〜2022.12.07〜

隅田川で展開する地域で作りあげる『マルシェ』

隅田川×地域・マルシェ

川と街そして人をつないで、新しい集いの場をつくる「隅田川マルシェ」を展開するイワタマサヨシ氏をコーディネーターに、隅田川を愛する多彩なゲストをお迎えし、幅広いテーマについて意見を交わしました。

交流会コーディネーター　イワタマサヨシ（隅田川マルシェ実行委員長）

●いわたまさよし●

隅田川マルシェ実行委員長 「つながる」「つむぐ」「つどう」をキーワードに沢山の人と一緒にひとつの作品を作るソーシャルアートプロジェクトを実施。2019年よりボランティアによる手作り感のあるソーシャルマルシェ「隅田川マルシェ」をスタート。日比谷公園では1万人以上があつまる「空と緑のマルシェ」を開催。コロナ禍で発表した作品「ライトバルーン」は多くの方々から支持されている。

イワタ：隅田川と街もしくは人がどういうふうに関わっているのかという部分を、企業、大学、アーティストそれぞれの目線からのお話をお聞きしたいと思います。

タリーズコーヒー 隅田公園店の取組み

知久：タリーズコーヒー隅田公園店は、都内初の河川敷地のカフェとして2013年10月にオープンしました。これは台東区が従来からの観光拠点に加え、2012年に完成したスカイツリーが見える拠点を川辺に作りたいという公募でした。事業コンセプトは、①にぎわいの水辺空間を作る②誰もが訪れたくなるカフェを作る③水辺とまちをつなぐ④水辺空間の保全・創出となっており、景観、環境に合った店舗づくりというのも審査基準に盛り込まれていました。当社ではスカイツリーが見え、桜が鑑賞できる天窓をつける。そして町内会に入って地元活動を行う。「誰でもトイレ」を外付けにするなどの提案を行い選んでいただきました。また、売り上げの一部を地域に還元するということも公募の条件でした。オープンに際しては、地元の皆さんから「ゴミが多くなってしまう」という声をいただき、まずは台東区の掃除の仕組みを使って「大江戸清掃隊」というのを同じく出店している松竹さんと一緒に始め、今年で9年になります。

Photo by Tully's Coffee Japan Co.,Ltd.
タリーズコーヒー隅田公園店前で清掃する様子

ウッドデッキのテラス席についても当初から設置することができませんでしたが、アンケートで近隣住民の声を吸い上げるなどの活動を行い、1年経って席を置くことができました。そこで学んだことは、にぎわいを生むための施設だからといって性急なにぎわいを求めるのではなく、地元の方々と意見を交わしながら徐々に進めたほうがいいということでした。地域還元費についても、地域の未来とか、そこに暮らす人々の夢の実現とか、そういったことへの協力を着実にやっていくことだと思っています。

イワタ：隅田公園のタリーズ、すごく素敵な場所ですよね。次は菅原先生よろしくお願いします。

Guest speakers

菅原 遼

日本大学理工学部海洋建築工学科助教
専門分野は、河川・運河・海を活かした地域計画。水の特性を活かした建築計画。都市の水辺の親水空間計画・デザイン。水辺の賑わいづくりのための実践活動。趣味はSUP

知久 和男

タリーズコーヒージャパン
タリーズコーヒーは、東京都内で初めて河川敷地内のカフェをオープン。今後の水辺を盛り上げていくために、"水辺とまちがつながる相乗効果"で、さらなる盛り上がりを醸成していきます。

大西 みつぐ

公益社団法人日本写真家協会正会員
生まれ育った東京の下町と、湾岸エリアをホームグラウンドとして活動。町とそこに集う人々を写し取った作品で広く知られる写真家。「遠い夏」で第18回木村伊兵衛写真賞受賞。

mizube barで楽しむ様子

隅田川を日常的な居場所に

菅原：「隅田川テラスの親水デザインと賑わいづくり」というテーマで、研究者の視点からお話しをさせていただきます。

新型コロナの影響で在宅していた時に、散歩がてら隅田川テラスに写真を撮りに行ったんですが、ビックリするほどすごい人出で、これって人間は圧迫された時に潜在的に水辺に行きたくなるんだなと確信しました。1967年頃から「身近な水辺空間をもっと大切にしよう」という行政の方針から、隅田川テラスは意図的に親水性を意識したデザインとなっていきました。また、隅田川の水辺にカフェや人々が集まれる場ができるにつれ、川側を建物の表とするものが増えてきました。これは河川法が緩和されたためで、簡単に言うと民間の方でも地域の合意を得た上で、新しい使い方ができるようになってきたからです。

その第一号が広島市の京橋川沿いにあるオープンカフェです。これができる前は暗い場所で違法駐輪も多く、地域にとっては川辺が厄介な場所だったんです。今ではオープンカフェができたことによって、夜も明るく非常に安全性の高い場所に変わりました。また大阪の土佐堀川沿いにある北浜テラスでも、景観を楽しめる川床のような狭い飲食空間ができ、最初の3店舗から今では14店舗に増え、その結果、背後の建物の価値も上がりました。そして隅田川の「かわてらす」は、若い人ばかりでなく地域の方々にも日常的に利用されています。そういう意味でもイワタさんがやられている隅田川マルシェは日常的な居場所であり、かつ目的地としても重要な役割を果たしているのではないかと思います。

mizube barで 地域づくり水辺づくり

川の手すりに付けるテーブル「mizube bar」を研究室の学生と共につくり、隅田川マルシェに設置しています。このアイディアは、コロナ禍で飲食店が営業を制限されていた頃、学生たちとの「川沿いの店でテイクアウトする時にテーブルがあったらいいよね」という話からスタートしました。「手すりにつければ」、「店がお客さんに貸し出し、帰りにゴミと一緒に返してもらえば」などどんどん発想が膨らんでいきました。身近な水辺空間を「飲食の場」へと転換させるためのツールの完成です。

水辺のテラスは、今や日常的な居場所として位置付けられてきました。我々もマルシェと共に、隅田川流域の地域価値の向上につながるよう活動したいと思っています。

イワタ：mizube barにビールを置いたら必ず写真が撮りたくなりますよね。ありがとうございました。次は大西先生、お願いします。

隅田川で展開する地域で作りあげる『マルシェ』

かわてらす（LYURO（リュウロ）東京清澄）

写真は過去を紡いでいく

大西：明るく未来が見えてくるお話を二人の先生方からいただいたのですが、地域に居る人間としては近過去からつながる隅田川を中心に、水辺空間の話をしたいと思ってます。

「川とともに生きる町」と題した写真をお見せします。（※著作権の関係で写真は掲載していません）。まず最初の写真は小学校１年生の時の私で、隣に母親がいます。当時は高いマンションがありませんから、空が非常に高く見えますね。このように古い写真を見るといろんなことが浮かび上がってきます。

この地図は雑誌「散歩の達人」の深川特集で原稿を依頼された時に描いた「記憶地図」です。僕の場合は写真が記憶の源泉ですから、写真を元に地図をつくっていくわけですが、そうすると写真に写っていないところまでの記憶が蘇ってきます。それをこう勝手に落とし込んだのですが、これって近過去と向き合ったということなんですよね。私が住んでいた町は今で言う森下三丁目で、「深川育ち」といっても墨田区寄りの町でした。この町はかつての簡易宿泊所街で、日雇い労働者がたくさん暮らしていました。子供たちの中には筏の上で遊ぶ子もいましたが、僕はやりませんでした。親に「筏に乗って間に落ちたらお前死ぬよ」と言われていたからです。そんな危険を伴う少年の冒険の場でもあったというのも事実です。ノスタルジーに浸りながら我々はどこから来たかということを考えた時に、「戦後」というのがキーワードになっているなと思いました。戦火を経て戦後昭和の高度成長の中で町は発展し、そこに隅田川もこの深川の風景も一緒に動いてきたわけです。そこには戦後の歩み、我々の父母の暮らしそのものがあるのです。そういう記憶を忘れてはならないわけで、記憶を紡いでいく中で町空間、水辺空間がこれから広がってほしいなと思っています。

イワタ：深川は素敵な場所ですね。大西先生の写真は、川が写っているだけで絵になる感覚があります。では、最後に私が隅田川マルシェについてお話をさせていただきます。

隅田川マルシェから学ぶ

イワタ：写真のように沢山の人がマルシェに遊びにきてくれます。隅田川マルシェをやる前は、隅田川は街の外れと思っている人たちが多かったと思います。だけど、江戸時代に遡ると川が中心的な場所でした。だから、もう一度、川を街の中心にできたらと隅田川マルシェをやりながら考えていました。そんなときに、くしくもコロナで緊急事態となり、隅田川テラスを散歩する人が増えました。そして、多くの人が水辺の豊かさに気づいたのだと思います。そして実際に本当に多くの人がマルシェに来てくれました。

隅田川テラスは散歩やランニング、釣りなど様々な使い方がされています。そこには共通項があって、みんなが静かに使ってることです。そこが重要なんです。初めてマルシェを開催する前日に１本の電話がありました。「隅田川の近くに住んでいるものだが、静かに暮らしたいのでマルシェなんかやらなくていい」という対岸にお住まいの方からでした。以前はそれほど意識していなかった対岸ですが、それ以来、隅田川の近くに住んでいる人たちと、どう向き合っていくのか、ということの大切さに気づきました。

僕がマルシェをはじめたきっかけは、「みんなが集う場所をつくりたかった」からなんです。僕の自宅近くに毎週日曜日、歩行者天国になる商店街があります。でも折角の歩行者天国もあまり使われていない現状があります。そこで不要な子ども用のプールを集めて、「歩行者天国で水遊びをしませんか」と友人たちと提案してみました。実は歩行者天国になる日曜日はシャッターを下ろしている店が多いんです。「水遊び」に参加された方々にはとても喜んでもらえたのですが、商店街は相変わらずシャッターを下ろしたまま。その後も書き初めなど何度かイベントを実施しましたが、状況が変わることはありませんでした。

次に、堤防を利用したアートプロジェクトを実施したときの出来事をお話しします。ピンク色で描いてもらった小さな魚の絵を集めて、大きな魚の絵を作るプロジェクト。小さな子どもさんから高齢の方まで多くの方にご参加いただいた作品でしたが、「ピンクが嫌だ」という１本の電話で、すぐに剥がすことになってしまったんです。川沿いだけでなく、街中にも異なる考えを持った人たちがいることを忘れずに、それぞれの意見を尊重しながら、何事も常に丁寧に進めていかなければならないなと思っています。

テラスに合わせて みんなで工夫する

マルシェを始めた頃は、一般的な4本足のテントを使っていたんですが、幅の狭いテラスではお客様も窮屈だし、ランナーも通れなくなってしまいます。そこで考えたのが会場にもお持ちしたスタンドです。といっても僕が考えたわけではなく、マルシェ実行委員のメンバーが元々作っていたものをカスタマイズしました。隅田川テラスで使うためにテント素材をターポリンという雨に濡れても大丈夫なクロスに変更して背面まで垂らしたり、さらにふたりが並んで入れるように少し幅を広げたりしました。食品を扱う場合は、サイドに幕をつけることで三方囲いにも対応しています。

隅田川マルシェ

夜の開催時には、モバイルバッテリーを使って「灯り」を作るなど、工夫をしています。テラスは街灯が少ないので「暗い」と感じている方が多くいますが、電源がなくてもアイディア次第で実施可能になるのです。

「ない」ことをマイナスと捉えず、「ないことを楽しむ」ために「アイディアでなんとかしよう」というのが僕たちのマルシェの発想です。

小さな輪を沢山つくる

街には町内会やPTA、商店街など多くの輪が存在します。水たまりに落ちる雨粒は小さな綺麗な輪を作ります。そこに石を投げ込むとできる大きな輪は小さな輪を崩してしまいます。だから比較的簡単にできる小さな輪をたくさん作ろうと考えています。そのひとつが、隅田川マルシェです。これからの課題は、マルシェを日常的に開催する方法を見つけることと、今日のサポーター会のように、川に関わってくれる人をどうやって増やしていくのかという２点です。このふたつがクリアできれば、もっと隅田川を素敵な場所にしていけるだろうなと思っています。

交流会レポート〜2023.01.18〜

隅田川を使いこなすためのヒント

隅田川×未来

拡大交流会のしめくくりとして、各交流会をコーディネートしていただいた３人からこれまでの経験で得た隅田川の使い方のヒントや課題、また皆さんから寄せられた質問についてお話をいただきました。

波紋のようにつながっていく

清宮：昨年「隅田川道中」をやってみて気づいたのは、「公共空間のイベントって波紋だな」ということです。誰かがことを起こす。するとそれに関わった人がまわりの人を呼び、さらにその呼ばれた人が知り合いに声をかけるといった具合に、まるで波紋のようにどんどん輪が広がる。隅田川に接した７つの区の人口を足すと、およそ240万人になります。これは名古屋市に匹敵する人口です。隅田川というのは、それだけのポテンシャルを持っている場所であり、だからこそ、たくさんの仲間と巡り会える可能性を秘めています。

やりたい人をサポートする仕組み。もちろん、波紋の中心にあるのは個人の表現そのもの。それをいろんな人たちが支え、パートナーが増えていく。身近なところでは「スピーカー持ってないから貸して？」とか、ダンスパフォーマンスやってみたいんだけど「音楽つくれる人いないかな？」みたいな。で、だんだんとそこに行政だったり、地元の企業からの金銭的な支援だったり、大学や研究機関からの技術的なサポートなんかが加わって関わりが濃くなっていく。このパートナーシップをもっと発展させるために、まずベースとなるフォーマットを作りたいと思っています。それをみんなが利用して、やりたい人がやりたいって言ったときに、周りからサポートできる体制をつくることが、最終的には最も大事なんだと思います。

隅田川道中

Coordinator

清宮 陵一
隅田川×文化・芸術
コーディネータ

岩本 唯史
隅田川×水辺活用
コーディネータ

イワタ マサヨシ
隅田川×地域・マルシェ
コーディネータ

大川原雄一郎
東京都建設局河川部

独自のフォーマットをつくる

イワタ：いま「マルシェを日常的に開催するにはどうしたらよいか？」ということを真剣に考えています。マルシェをやるときに、僕が一番苦労しているのは保健所対応です。保健所の届出書類は販売品目の詳細をすべて記入できるだけのスペースがないため、独自のフォーマットを作成して提出しています。通常の場合、「やきそば」と商品名を書くだけですが、マルシェでは「原材料名」「仕込方法」「会場での保管方法」「会場での提供方法」を具体的に記述をできるようにしてします。この独自の体裁は、保健所や出店者さんの意見を取り入れながらバーションアップしています。最近では、保健所の方からも「わかりやすい」と言っていただけるようになりました。

アンケートに「テラスを利用するイベントを考えていますが、利用の手続きが分かりづらいです。」というご意見がありましたが、そういうときに利用できるのが「隅田川テラス護岸等一日利用届（以下、一日利用届）」という制度です。ネットで「一日利用届」と検索すると出てきます。イベントなど、工作物などの設置を伴わない、準備・片付けを含めて３日以内の使用の場合に使える制度になります。

ちょっとした工夫が必要

その他にもトイレ、ゴミ、排水、搬入、火気問題など、課題はたくさんありますが、ネガティブにならずにどう使って面白くしようか、とポジティブに考えることが大切です。「火が使えないから温かいものは出せない」ではなく「どうやって保温して持っていくか」など出店者さんと一緒に思索しています。最初の頃、駐輪問題は大きな負担になっていました。ですが、「マルシェに散歩に来てください」とＳＮＳなどで発信するようになったら、駐輪問題がほとんどなくなったんです。このようにテラスを使うときには、ちょっとした工夫が必要なんですね。騒音問題や混雑についても、花火大会ならいいけどマルシェはダメみたいなことがあります。それは花火大会のようなイベントでやるものと、マルシェのように日常の中に溶け込んでいくものとでは、伝え方や考え方が違っているんだろうなと僕は思っています。心地よいと思える音や出店数など、そこに納まるちょうどいい規模とかやり方を見つけていくことが大切だと思っています。

連携で参加者も来場者も増やす

隅田川テラスで「どこから来ましたか？」と来場者に尋ねると、けっこう近くの人が多いんですね。そこで外の街の人をもっと川に呼び込む

隅田川マルシェ

隅田川サポーター交流会

ためにはどうしたらいいか考えました。1人でやれることって限界があるし、なかなか広がっていかない。でも、連携すると参加者も来場者も増えるし、子どもたちの笑顔もたくさん見ることができるようになります。街中でマルシェをやったり、他のイベントとコラボするだけで、連携の輪を広げることができるというのが、この1年間やった僕の答えです。年明け早々に都市養蜂をやっている人たちから、ハチミツがコアとなって街のいろんな施設が繋がっていくという話を聞く機会がありました。都市でハチミツを採る人、売る人、買う人、そのハチミツを使って商品開発する人、という具合にどんどん連携していく。だから、僕は今度「隅田川ハニープロジェクト」というのをやろうと思っています。みなさんも参加してくれたら嬉しいです。みなさんもやりたいことがあったら、岩本さんや清宮さん、僕に「やりましょう」、「一緒にやりませんか」って声をかけてください。隅田川テラスを使うヒントを得ることができると思います。

あたらしい公共空間の使い方の世界を切り拓く

岩本：「河川の利活用が進むといいですね」というのは、行政の人たちの言葉で、はっきり言ってわれわれには関係ないんですよね。そもそも利活用というのは目的じゃない。僕たちは面白いと思ったらから伝えたいというだけで、河川が活性化したというのは、結果としてそうなっただけなんです。また、やりたいという人たちの妄想力の推進は絶対に必要ですが、その「やりたい」と思った時にやれる環境があるかということのほうが大切です。それを作っていくにはどうしたら良いかというお話をします。

我々は当たり前のように使っている「社会実験」という言葉があります。これは最初から大きくやるのではなく、まずは実験してみて問題があったら改善していきましょうということなんですね。だって誰もやったこともないことに対して、合意形成していくためにも「1回やらしてください。小さくやりますから」、「それを大きくしてもいいですか」という合意を取って進めるのが大切かなと思います。

アンケートに「失敗例を教えてください」というのがありましたが、失敗例はたくさんあって、例えば戦後食糧難の時に河川を畑にしたことがありました。そこに権益が発生して、畑を前の状態に戻すときにめちゃくちゃ大変だったという記録があります。あと河川に係留する船がどんどん増えていって放置する人も出てくる。これは自分の利益のために公的な場所をずっと使っていることになるわけで、「私は公共のためにやってます」と言った人とは、価値観が全然違うので、どうしても食い違いが起きてしまう。その垣根を越えることが利活用に繋がっていく。それからこうやってみなさんと建設的な会話ができる場もあります。それらによって過去の失敗を乗り越えて、新しい公物管理の世界を切り拓いてくれるんじゃないかなと思っておりますので、みなさん是非一緒にやりましょう。

サポーター制度のこれからについて一言

イワタ：とりあえずやりましょう。サポーターに入ってください。我々も大歓迎ですし、ただこういうつながりが生まれる場に参加できるということも大きな価値だと思います。つながりができることで水辺空間・公共空間を使っていけるものだと思っているので、是非入っていただいて横のつながりをつくっていければいいなと思います。

岩本：たぶんこれから起きることは、僕らがやらなくてはいけないんですが、今どんなアジェンダがあって、何を解決しようとしているのか、どんな取り組みがあるのかということを共有できる掲示板を作ること。そして、そういうステップをいっしょに高め合っていくマネジメントが必要だと思っています。外部に頼るのではなく、アプリなどを使って我々自身で組み立てて、情報や意見を共有することでボランタリーな課題解決ができる組織になるといいなと思いました。

清宮：2012年に「隅田川パレード」というチアリーダー50人が隅田川を応援するという当時は謎に思っていたイベントの制作を担当したのですが、今思うとあのイメージがドンピシャなんです。みんなでポンポンを持って、イエーイ！みたいな感じで川も人も誰かれ構わず応援しちゃう、ある種の緩さを備えていることが必要かなと思っています。

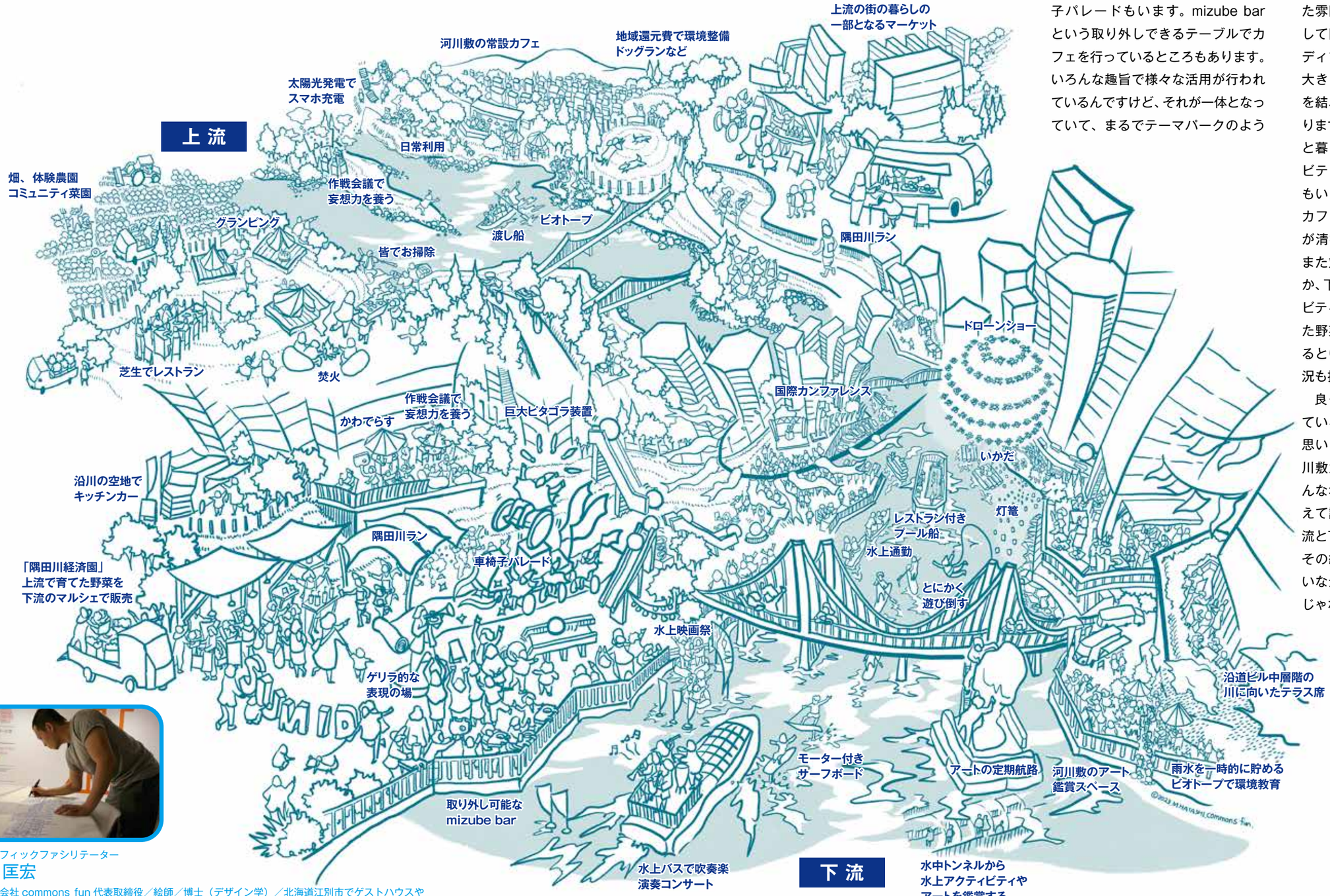
サポーターで何をするかというと、リソースの提供を、例えば「自分だったらこんなことできるよ」とか、「これが足りないんだよ」みたいなことが出てきたときに、それを補い合える仕組みができたらいいなと思っています。お隣さんに「今日、豚汁作り過ぎちゃったから食べない？」みたいな、なんかそういう意味で緩さみたいなものが発揮されるといいんじゃないかなと思います。

大川原：隅田川サポーターは、緩くつながっていくもので、「SNSで情報発信し合いましょう」とか、「年に1回合ってみんなが何しているか聞こう」とか、そこから活動のつながりに発展していくのが面白いなと思っています。

交流会の主役であるサポーターの方が、今後何をしていかれるのか、それを一緒になって叶えたいと思っています。関わり方はいろいろとあると思います。そんな多様性みたいなものも全部含めて、川で何ができるかというノウハウをサポーターのみなさんはいっぱいお持ちになっているので、それをみんなで共有し、みんなが喜ぶような使い方につなげていけるようになれば、この交流会やサポーター制度も生きるのかなと思っています。みなさん是非サポーターに入ってください。

妄想「隅田川万博絵図」

**第１回の隅田川クルーズからはじまり、全５回にわたり開催してきた拡大交流会。
各回の参加者から寄せられた「未来の隅田川」へのアイディアや妄想を、
絵師の林氏にイラスト化していただき、最後の交流会で解説していただきました。**



グラフィックファシリテーター
林 匡宏

株式会社 commons fun 代表取締役／絵師／博士（デザイン学）／北海道江別市でゲストハウスやシェアハウスを経営する傍ら、江別市役所・渋谷区役所の職員兼アドバイザーとして公民連携事業やまちづくりを推進する。議論内容をその場でイラスト化する「ライブ・ドローイング」という手法を用いて、札幌･江別･渋谷･長岡など国内外 26 都市の都市開発や地域再生の将来ビジョンを描き、その実現に向けて各地でコミュニティづくりと社会実験をプロデュースしている。

みんなの夢や妄想をカタチにしよう！

林：ちょっと本当にカオスな感じですけど、それがまたいいなと思っています。では、内容をご紹介しましょう。

隅田川マルシェをやっていたり、音楽を流している人がいたり、車椅子パレードもいます。mizube bar という取り外しできるテーブルでカフェを行っているところもあります。いろんな趣旨で様々な活用が行われているんですけど、それが一体となっていて、まるでテーマパークのように水辺が活用されているというようなイメージですね。

少し上流に行くと灯籠流しに、それを眺める子たち。この辺りは夜の景色なのですけどね、しっとりとした雰囲気のアクティビティです。そして巨大ピタゴラ装置っていうアイディアも、めちゃくちゃいいと思い大きく描いてみました。上流と下流を結ぶテラスにはランナーの姿もあります。さらに上流に行くと、ちょっと暮らしに根ざしたようなアクティビティがあって、昔ながらの渡し舟もいます。もっと上流にはオープンカフェがあり、その売り上げの一部が清掃活動費に還元されています。また対岸にはグランピングや畑だとか、下流とは違った空気感のアクティビティが行われています。ここで育った野菜が、下流のマルシェで売られるといった隅田川経済圏のような状況も描きました。

良く見ると、ところどころ話し合っている人たちがいることに気づくと思います。ビルの足元だったり、河川敷だったり、中洲だったりといろんな場所でいろんな人々が立場を越えて話し合っています。そこから上流と下流をつなぐ一体感が醸成され、その結果として「隅田川万博」みたいな景色が公共空間に生まれていくじゃないかなと思います。

こんなことやってきました

これまでもアート、マルシェをはじめ 隅田川をにぎわす 様々なイベントが行われてきました

隅田川ディスコ with ミラーボールカー

江戸から現代へ、進歩の象徴である「車」をミラーボールに見立て、空中に吊り下げて回転させる西野達の「ミラーボールカー」が隅田川をディスコ化！

地域の皆さんで花を育てる花守さん

隅田川のテラスにある花壇に花を植え、水やりなどのお手入れを定期的に行っているボランティアのみなさんです。

隅田川ミニ水族館

マルシェ会場の隅田川の水中はどのようになっているのかな？水槽の中に会場目の前の水中を再現します。

ストリートピアノすみだ川

隅田川のテラスにストリートピアノが出現！ピアノを弾いたり誰かの演奏を聞きながら、ゆっくり過ごせます。

キャンドルライト（両国）

隅田川の夜にキャンドルを添えて。たまには、ロマンチックに照らされた水辺で、素敵なひとときを。

隅田川マルシェ

隅田川を中心とした新しい文化圏を構築する「隅田川マルシェ」。川と街そして人をつないで、新しい集いの場をつくるソーシャルマルシェ。

つながるライトバルーン

風船を用いたイワタマサヨシさんの作品でテラスを美しく演出。

ナイトクルーズ

いつもとは少し違った角度から隅田川を眺めてみては。日中では気づかない、新たな発見ができるかもしれません！

鈴木康広「ファスナーの船」

都市の境界である川を「ファスナーの船」がひらき、対岸をつないでいきます。

隅田川リバーラン&ウォーク

隅田川のテラスで、ランニングやウォーキングは心地いい。

隅田川 森羅万象 墨に夢「すみゆめ踊行列」

北斎の描いた目出度くも美しい《踊行列図》を現代の隅田川に蘇らせるべく、この地に息づく森羅万象の営みを体験・体感しながらみんなが繋がっていく、新しい形の祭！